



リビア（解説p.1～2）

# 地理・地図資料

帝国書院

2010年度 1学期特別号





# リビア

2009年8月、国土の90%を砂漠が占めるといわれるリビアについて、地中海沿岸地域を中心に取材する機会を得た。首都のトリポリを中心に、乾燥地域の風土や人々の生活の工夫について、現地の様子をレポートする。



写真はすべて2009年8月撮影／帝国書院





**地誌概略** リビアはアフリカで4番目に広い国土をもつ国(1,774,440km<sup>2</sup>)である。地中海沿岸のわずかな農耕地帯を除いて、国土の93%は砂漠地帯である。海岸地域の気候は温暖な地中海性気候で、夏は乾季に、冬は雨季になる。内陸地域は広大な砂漠で、夏の昼間は猛暑となり、冬の夜間は零下の寒さとなる。真夏でも寒暖の差が激しい地域である。

この地中海沿岸には、ギリシア・ローマの古代遺跡が点々と散在している。

**地形と産物** リビアの砂漠は、なだらかな稜線を描く丘状の砂漠らしい砂漠、標高1000~1500m級の山岳地帯を形成する岩石砂漠などさまざまである。そのほかに点在する高原、オアシス、湿地帯、湖などがある。近年の考古学と地質学の調査によれば、紀元前6000年ころまで、サハラ砂漠の大部分は森林や草原におおわれていたという。先史時代の豊かな農耕や狩猟の光景は、世界遺産であるタドラット・アカスの岩絵に生き生きと描かれている。

ローマ時代までのリビアは実り多い農耕地帯でもあったようである。オリーブや柑橘類が整然と植えられており、地平線まで果樹園がひろがっていた。しかし、現代のリビアの農業は、雨季のわずかな降雨とオアシスなどの地下水によってかろうじて維持されているために、農産物の供給が急激な人口増加に追いつかず、

食料の4分の3を外国からの輸入に頼っている。

地中海に面しているリビアでは海の幸は豊富だが、スルト湾沖で日本の漁業会社がクロマグロ漁をしていることを知る人は少ない。2010年3月にワシントン条約によって大西洋と地中海のクロマグロの国際取引を禁止するという提案がEUから出されたが、リビアが反対に回ったために日本の立場が保たれたというニュースは興味深い。

**民族** リビアには、紀元前2000年ころのフェニキア人以降さまざまな外国勢力が侵入したが、それらの支配も海岸地域のみ集中していた。

現在のリビア人は、民族的には97%がアラブ系かアラブ系とベルベル系の混血だといわれている。ベルベル人(アマジグ人)とは、北アフリカからサハラ砂漠にかけての広大な地域に先史時代から住んでいたとみられる人々である。リビアには黒人系のトゥアレグ人も多い。

**表紙写真** ナールートの旧市街である。ナフーサ山地の西端に位置するオアシスの町。気候は乾燥しているが温暖。周辺の岩山の地層が水平状になっているのは、この地域に地殻変動が少なかったことを示している。そのために周辺には台形のテーブル状の岩山が多くみられる。

## 取材レポート

関西国際空港からドバイ経由、15時間かけてリビアの首都トリポリに着いた。まずは、世界遺産にも登録されているアルジェリア国境近くのオアシス都市ガダーミス(写真④)。暑さをしのぐために、日干しレンガでつくられた通路が町全体に張り巡らされており、建物の内壁や外壁が、白を基調としたいへん美しい都市である。残念ながら遺跡全体が修復工事中で、本来の美しい姿は、ごくわずかしか見ることができなかった。次はガリアン(写真②)へ。陶器製造で有名な町だが、ベルベル人が生み出したダモース(穴居住宅、写真⑤)がある。ダモースは、夏の暑さと外敵の襲来をさけるために

### 帝国書院取材班

つくられたそうだが、今は生活している人はいない。実際に中に入ってみたが、思ったより涼しく快適だった。

トリポリには、砂漠の国リビアを緑化するための大運河をコントロールする管理センターがある(写真③)。大運河といっても地中に埋められた巨大給水管のことであり、リビア中央部の地中深くに貯まった地中化石水をポンプで汲み出している。非常に巨大な国家プロジェクトのようで、これによって砂漠に農地を生み出し、産業を育てる計画のようだ。現在のところかなりの部分ができあがっており、本年中にはすべて完成するようだ。

最後に、レプティス・マグナ(北ア



フリカ最大の古代ローマの遺跡)を訪れた。とにかく広大で、まだ完全に発掘されたわけではないので、その規模は計りしれない。ローマ劇場(写真⑥)は、海に面しており、海の色(エーゲ海ブルー)と空の青色のコントラストがとても綺麗だった。